『徒然草』に見られる経済観

―第二百十七段を中心に―

韓　智　媛

はじめに

人間は、何らかの形で経済的な行為に関わらざるを得ない。今からおよそ七百年前、遁世者として俗世間と脱俗の世界を行き来した兼好もその例外ではなかった。

山城大徳寺文書には、正和二年（１３１３年）兼好が「兼好御房」という名で田地壱町を買い取ったことが記されている。[1] 兼好の出家時期の下限を推測させるこの資料は、出家したころ兼好が所有していた財産について知らせるものとしても意味がある。

兼好の実生活はどういうものだったであろうか。『徒然草』の第二百二十四段には、兼好のところに訪ねてきた陰陽師有宗入道が、「この庭のいたづらに広きこと、あさましく、あるべからぬこと也」と言い、畑にするように忠告する話が見える。自分のことをほとんど語らなかった兼好の実生活が、わずかながらうかがわれる挿話である。どうやら兼好は、世捨て人とは言え、ある程度生活の基盤を持ち、安定した生活を送ったようである。

無常を自覚し、心安らかに暮らすことを終始語っている『徒然草』では、無常観とは一見無縁であるかのように見なされる経済や金銭的な側面への、兼好の一貫した関心が看取できる。

『徒然草』の時代は、貨幣経済が確立されつつあり、人々の生活の中でも「銭」の世界は身近なものになりはじめていたという。『徒然草』の中で、兼好の経済への観点、金銭感覚たるものは、いかに描かれているのであろうか。

第二百十七段は、『徒然草』における経済への観点、ひいては経済的な価値と無常の関係を考えていく上で欠かせない章段である。経済観の特徴を最も総合的に物語っていると思われる第二百十七段を中心に、無常という大前提と経済観とが兼好の中でいかに共存しているのかについて検討していきたい。

一　無常観の中に見られる銭の比喩

『徒然草』では、生活に密接に関わる形で、兼好の金銭的なものへの考え方をうかがわせる話が見られる。

例えば、山里の閑寂な住まいの中で家主の物欲を象徴する柑子の木を見つけて幻滅したという第十一段、あしをつぎ込んだ甲斐もなく、無駄に立っていた亀山院の水車を宇治の里人が廻らせたという

第五十一段、金に頓着しない盛親僧都の超越的な風貌を伝える第六十段の話などからは、主なる主題の裏面から、銭の世界に触発された兼好の多様な感想が垣間見できる。

この他、特に世の無常を力強く語る章段の中で、無常の論理を導く引き合いとして使われている金銭的な比喩は注目される。兼好にとって、経済的な側面は、時代相の反映という外面的な関係にともなって、『徒然草』の主流の思想である無常観と表裏の関係として認識されていたと考えられる。

寸陰惜しむ人なし。是、よく知れるか、愚かなるか。愚かにして怠る人のために言はば、一銭軽しといへども、是を重ぬれば貧しき人を富める人となす。されば、商人の一銭を惜しむ心、ねんごろなり。刹那覚えずといへども、これを運びてやまざれば、命を修する期たちまちに至る。されば、道人は遠く日月を惜しむべからず。ただ今の一念空しく過ぐることを惜しむべし。

もし、人来りて、我が命、明日かならず失はるべしと告げ知らせたらんに、今日の暮るる間、何事をか楽しみ、何事をか営まむ。われらは生ける今日の日、何ぞ其時節に異ならむ。…（以下略）　（第百八段）

この段では、商人の一銭を惜しむ心を引き合いに出し、寸陰愛惜の心構えが説かれる。商人が一銭をも軽んぜず大事にすることと、道人がわずかな時間も無駄にせず修行に励むことを同一視している。そこで、今生きている今日という一日は、明日死ぬことを予告された人に与えられたその今日の時間に変わりがないとし、無益なことで一生を送ることほど愚かなことはないと語っていく。

兼好が、金銭の比喩をもって無常を語っているのは、説得力を持たせようとする論法上のねらいだけではないであろう。経済的な側面を無常の立場からとらえていこうとする、思想の根源的な部分にもう一つの理由があると考えられる。

次の第九十三段でも無常の論理が語られるが、牛の取引に関する例話から話は始まる。

「牛を売る者あり。買ふ人、「明日その価をやりて、牛を取らむ」と言ふ。夜の間に牛死にぬ。買はんとする人に利あり。売らむとする人に損あり」と語る人あり。

これを聞きて、かたはらなる者の言はく、「牛の主、まことに損ありといへども、又大なる利あり。其故は、生ある物死の近きことを知らざること、牛すでにしか也。人また同じ。測らざるに、牛は死に、測らざるに主は存ぜり。一日の命、万金よりも重し。牛の価、鵞毛よりも軽し。万金を得て一銭を失はん人、損ありと言ふべからず」と言ふに、人皆嘲りて、「其ことはりは牛の主に限るべからず」と言ふ。

又云、「されば、人死を憎まば、生を愛すべし。存命の悦、日々に楽しまざらんや。愚かなる人、この楽しみを忘れて、いたつかはしく外の楽しみを求め、此宝を忘れて、危うく他の宝をむさぼるに、心ざし満つことなし。…（以下略）（第九十三段）

お金を払って牛を渡される前日牛が急死してしまったから、牛の売り手は損であり、買い手は得をした、とは眼前の現象的な得失だけを問題にした考えである。この同じ問題を「かたはらなる者」は、人間の生死の自覚の契機として捉えている。すなわち、牛の主は、損をした一方大きな利益もあった。牛の突然の死によって、死の近いこと、命の大切さを知らされたのである。そこで、一日の命が万金より重いことから、「存命の悦」を楽しまなければならないことへと話は展開していく。

第九十三段の主眼は、無常を語り生の価値を見つめ直す後半部に置かれている。だが、経済的な側面は無常を認識する上での契機として見られ、後半部にいたるまでの言葉の論理には、金銭的なものへの関心が、無常の認識とその対処という生き方の問題といかに関わっていくか、という兼好における大きなテーマの行方が示唆されていると考えられる。

「人、恒の産なき時は恒の心なし」（第百四十二段）と述べている兼好は、無常を認識することの重要性と同じ程度に、生における銭の大切さを認め、より人間の立場から金銭への言及をしているのであろう。無常の認識と銭の世界は、二律背反するものではなく、兼好の考えた人間存在の両面であり、兼好自身の両面でもあったのではなかろうか。

二　「大福長者」の致富論

第二百十七段には、蓄財を人生の目標とする「大福長者」の人生観と、それに対する兼好の意見がそえられている。次は、第二百十七段の全文である。

ある大福長者の言はく、「人はよろづをさしをきて、ひたふるに徳を付くべきなり。貧しくしては、生ける甲斐なし。富るのみを人とす。徳を付かむと思はば、すべからく、先其心づかひを修行すべし。其心と云は、他の事にあらず、人間常住の思に住して、仮にも無常を観ずる事なかれ。是、第一の用心也。次に、万事の用を叶ふべからず。人の世にある、自他につけて、所願無量也。欲に随て心ざしを遂げんと思はば、百万の銭ありといふとも、しばらくも住すべからず。所願はやむ時なし。財は尽くる期あり。限ある財をもて限なき願に随ふこと、得べからず。所願心にきざすことあらば、我を滅すべき悪念来りと、堅く慎み恐れて、小要をも成べからず。次に、銭を奴のごとくして使ひ用ゐる物と知らば、長く貧苦を免るべからず。君のごとく、神のごとく、恐れ尊みて、従へ用ゐることなかれ。次に、恥に臨むといふとも、怒り恨むることなかれ。次に、正直にして、約を堅くすべし。此儀を守りて利を求めむ人は、富の来ること、火の乾けるに付き、水の下れるに従ふがごとくなるべし。銭積りて尽きざる時は、宴飲声色をことせず、居所を飾らず、所願を成ぜざれども、心とこしなへに安く、楽し」と申き。

抑、人は所願を成ぜんがために、財を求む。銭を財とすることは、願ひを叶ふる故也。所願あれども叶へず、銭あれども用ゐざらむは、全貧者と同じ。何をか楽みとせむ。此掟は、ただ

人間の望を断ちて、貧を愁ふべからずと聞えたり。欲を成じて楽しみとせんよりは、しかじ、欲なからむには。癰疽を病む者、水に洗ひて楽しみとせんよりは、病まざらむにはしかじ。ここに至りては、貧福分く所なし。究竟は理即に等し。大欲は無欲に似たり。

（第二百十七段）

この段では、現実的な人生観に根ざした「大福長者」の主張が記され、その後兼好の反論たるものがつづく。

食・衣・住・薬を生活の基本条件とし、この四つが欠かないのを「富めり」（第百二十三段）とした兼好にとって、物質的な価値を人生の目標とすることなどは考慮の対象ではないはずであるが、この長者の主張にはかなり印象深いものがあったようである。

さて、「大福長者」の人生の最大の目標は「徳を付く」ことである。貧しくては生きるかいがない。富む者だけが人の名に値する。そのためには、次の五つの項目を心がけるべきであるとする。

第一に、この世は永遠に不変だと思い、かりそめにも無常を観じてはならない。第二に万事の用を叶えてはならない。人間の願うところは無限である。欲望のままに望みを果たそうとすると、百万の銭があっても手元にとどまっているはずがない。限りある財宝で無限の欲望を満たすことは不可能である。欲望が心に生じることがあれば、自分を滅ぼす悪心が生まれたのだと堅く慎み恐れてわずかな用事をも満たしてはならない。第三に銭を君のように神のように畏敬すべきである。第四に銭のために恥ずかしい目にあっても怒ったり恨んだりしてはならない。第五に正直を心がけ約束を堅く守るべきである。以上のことを生活の中で厳守すれば、富はおのずから間違いなく集まってくると述べ、銭が積もりさえすれば、何も欲望を遂げなくても心はいつも安らかで楽しいと結んだ。

この「大福長者」の論に対して、兼好は、銭を求める理由について批評を加える。人間はそもそも所願を叶えるがために「徳を付く」のである。欲望があっても叶えず、銭があっても使わないでは全く貧者と同じようなものである。銭を貯める行為は、所願を実現するための手段に過ぎない。欲望を成就しないのならば、最初から欲望を抱かない方がいいと反論し、ここにいたっては「貧富分く所なし。究竟は理即に等し。大欲は無欲に似たり」と結論づける。

この段は、なかなかその真義が把握しがたく、どういう観点から読むかによってその解釈の仕方や評価も分かれるようである。今までの研究は、大きく後半の兼好の批評に肯定的な意見と、何らかの論理的な飛躍や矛盾、限界をみようとする意見とに大別できよう。特に、否定的な見解は、この段を理解する上で確認しておく必要があると考えられる。

橘純一氏は、「この説を、兼好は逆説的なものに解し、『このおきては、ただ人間の望を断ちて、貧を憂ふべからずと聞えたり』と言ってをるが、これは甚だ無理な理解であり、この真実を穿った金持心理と清貧心理とを結びつけて、凡聖不二の消息にまで持って行くのには、推理の飛躍があり過ぎる」[2]とした。

永積安明氏は、兼好の論理は、「ごく常識的な意味で筋がとおっているが、長者の説く『楽しび』との間には早くも避けがたいずれが見えてくる」とし、「大福長者の自己矛盾を暴露しようとした兼

好も、長者の説く致富の論理の内容を、正面から論破できず、形式的な側面からだけ問題にし、相対世界の無差別観に逃げ込んでしまっている[3]」と評した。

これらの論に代表される否定的な評価は、大なり小なり兼好の説から自己流の限界を指摘しており、現実世界に対応しきれず、自分の立場を保留する兼好の姿を見出そうとした指摘であろう。確かに兼好は、長者を自説の範囲の中で解釈しようとした感じがしなくもない。それに、「大福長者」の所期の目的を達成したことからくる心の充足感は全く考慮に入っておらず、銭があっても欲望を叶えない状態と、銭がなくて欲望を叶えられない状態とを没価値化してしまっている。

しかし、その一方で、兼好の意見は必ずしも長者を否定しているとは見られず、またその時代がつくり出した新しい人物をリアルに描き出していることも間違いない事実である。

三　常住と無常

「大福長者」の主張の中で、兼好との違いが最も目につくのは、「常住の思」である。長者が第一に掲げている「常住」の思いで生きるという人生観は、『徒然草』の主張とは相反し、『徒然草』のなかでもっとも愚かなこととされる。「人はただ、無常の身に迫りぬる事を心にひしとかけて、束の間も忘るまじきなり」（第四十九段）と無常の自覚を第一義とした兼好は、愚かな人は「常住ならむことを思て、変化のことわりを知ら」（第七十四段）ないと語っている。ところが、兼好は、これに関しては何の言及もせず、二番目の所願を叶えるべきではないということだけをもっぱら問題視している。

そもそも人間は様々な願いを叶えるために銭を求める。銭があっても使わず、所願があっても叶えないのなら、貧者と何の変わりもない。何を楽しみとしようというのであろうか。これは、欲望を断念して貧乏を悲しんではならないとの主張であると解される。これなら、そもそも銭を求める意味がない。ここにいたっては、貧富の区別がない。兼好の批判は、長者の主張に内在している矛盾を突いており、人情に沿った自然な考えであると言えよう。

一方、「銭を貯める」という世俗的な価値を求めてはいるものの、その目標のための長者の実践方法は非常に精神的な面が強調されている。例えば、欲望を満たすべきではないとする部分は、次の第二百四十一段を連想させる。

所願を成じて後、暇ありて道に向かはむとせば、所願尽くべからず。如幻の生の中に、何事をかなさむ。すべて、所願皆妄相なり。所願心に来らば、妄心迷乱すと知て、一事をもなすべからず。直に万事を放下して道に向かふ時、障りなく、所作なくて、心身永く閑也。（第二百四十一段）

願い事を遂げて、暇になってから道に向かおうとすれば、願いは尽きるはずがない。すべて、願望はみな心の迷いからくるものである。願望が心にきざしたら、迷いの心が本心を乱すのだと知って、願望を一つも成してはならない。特に、傍線部分は、「所願心にきざすことあらば、我を滅すべき悪念来れりと、堅く慎み恐れて、小

要をも成べからず」という長者の論と酷似している。

これに関して、藤原正義氏は、長者が当時流行していた時宗から影響を受けている[4]とする。兼好における時宗の影響を論証するための論の中で、氏は、『一遍上人念仏安心抄』の中に、「総じてかぎりも財宝を以て、限りなき願を充んとせば、かなふ事なくして、却て災と成也」という一文が見られることから、長者は、時宗における所願、妄想一切の放棄に学び、そこに己れの思想の明確な表現を見出し、時宗の用語法を採用しつつ己れを表示したのだと推測している。そして、兼好はこの長者の言葉の中に、自分が共有し、また共有しうるべきものだけを見たのであり、その限りにおいて長者を理解したのであるとした。この論は、時宗という共通分母の媒介を通じて兼好の長者への立場を解釈しようとしたものであろう。

第二百四十一段の本文をも含めて、確かに「大福長者」の意見と兼好の意見とは、全く違う立場から発せられているにもかかわらず、真っ向から対立しているようには見受けられない。兼好の論からは長者を正面から非難しようとする姿勢はそれほど見られないのである。

芝波田好弘氏は、第二百十七段に照明をあてた最近の研究[5]の中で、「大福長者」の意見を仏法的な見地からとらえられる可能性を提示し、そこからこの段における兼好のねらいを汲み取ろうとした。そこで、「長者」が世俗的なものを追求する人間でありながら、その一方で精神的な修養を堅持していたことを強調し、宗教的な求道者と変わらない位置にいるとした。ならば、長者の目的は兼好と同様に、仏道の悟りを得ることへと転換することも可能ではないかとし、兼好は、発心の問題を述べんがために長者の持論を取り上げ、「究竟は理即に等し。大欲は無欲に似たり」と批評したのではないかと結論した。

この論は、第二百十七段を理解するうえで一つの方向を提示している。長者の禁欲的な態度は、そのまま求道者の生き方であると言っても不思議でないほどであり、「徳を付く」という目的を道心へと転換させるなら、長者は直ちに仏道修行を成就できるかも知れない。

だが、氏が、仏法的な視点一辺倒から兼好の立場をとらえ、兼好が「究竟は理即に等し」という『摩訶止観』の思想を述べるために長者の主張を記したとしている点には、疑問の余地が残る。それに、氏は、長者の常住論について何の解釈の方法も提示していない。長者が発心するためには、人生の目標の転換とともに、無常の自覚が先決課題でなければならないのである。

兼好は、求道者の立場から長者を理解しようとしたのであろうか。「究竟は理即に等し。大欲は無欲に似たり」とは、長者の宗教的な可能性を語るものではなく、長者の非求道的な側面を強調するための言葉であろう。というより、この言葉に、兼好自身の求道者としての立場と兼好の長者への観点の保証を求めることは、無理であるように考えられる。

兼好の仏道修行者としての姿勢は非常に屈折しており、一概には言い切れない部分がある。求道的な立場に立ちながらも、必ずしも求道者の姿勢を貫いているとは見られない。例えば、今成元昭氏は、先に引用した、長者との表現の類似性が認められた第二百四十一段について、次のように述べている[6]。

第二百四十一段のように、多くの仏典が源泉として指摘できるような短章が、「万事を放下して道に向かふ時、さはりなく、所作なくて、心身ながくしづかなり」と結ばれているならば、そこに求められている「道」とは当然、「仏道」であろうと思量される―特に中世の作品であればそれは常識的なことである―のであるが、『徒然草』にあってはそのような一般性は通用しないのである。

すなわち、兼好における求道の本質は、仏道的なものと一致しない部分を有しており、常に宗教的な観点から兼好を理解しようとすることは、慎重にならなければならないと考えられる。

兼好の長者に対する立場を理解していくには、長者の「常住の思」にもっと注意を払う必要があるのではなかろうか。兼好は、所願と銭との関係だけをもっぱら取り上げ、長者の常住論に関しては何も語っていない。

長者は、「人間常住の思に住して、仮にも無常を観ずることなかれ」と語った。このわざわざつけ加えた「仮にも無常を観ずることなかれ」という言葉からは、長者が無常を相当意識していたことが逆説的に伝わってくる。長者は、常住を掲げながらも、無常を無視できない自己矛盾をほのめかしているようにさえ見える。

無常の道理がわかる人が現世の物質的な価値にこだわることはあり得ない。「徳をつく」ことと無常の認識は相容れない命題である。兼好は、長者が人生の目標のために「常住」を掲げるしかないことを見抜いていたのではなかろうか。

兼好は、長者の「常住の思」について触れていない。が、これは、兼好が最も語りたかったことであろう。世の中の無常の道理を認識することは兼好の最大の関心事であり、これに対して「常住」は長者の生き方を支える第一の条件であった。無常という大事を受け入れず、所願を断っても何の意味もない。無常と所願の相関関係は、長者には全く考慮されていないのである。そこで、大福長者を真正面から非難しようとしなかった兼好は、無常からは一歩引き、欲望と銭との関係だけを取り上げていると考えられる。

兼好は、長者の人生観が致富のためには正論であり得ることを十分理解していたのであろう。求道者さながらの方法論で人生の目標に向かう長者の存在自体を非難していないのはこのためであろう。しかし、長者は、結局無常を直視していず、兼好が主張する生き方からはかけ離れてしまっている。兼好の長者への関心は、批評の対象にしている所願と銭との関係以上に、実は長者の常住論に向けられていたのであろう。そこで、「常住」と特に二項目目の「万事の用を叶ふべからず」との間の矛盾を提示し、長者をはじめとする無常を直視していない人々にその覚醒を促そうとしたのではなかろうか。

では、「貧富分く所なし。究竟は理即に等し。大欲は無欲に似たり」、兼好のこの結語はどういうふうに解釈できるのであろうか。銭があっても使わない富者は、結果的に貧者と同じで、銭がないため使えない貧者と全く差異がない。すなわち、富を遂げていても長者のような生活姿勢では、真の意味での富者にはなり得ない。「貧富分

く所なし」とは、富者が貧者に見えてくるアイロニーを語っている。

「究竟」とは、天台宗で説く六即の第六で、仏の悟りの境地を、「理即」は、第一で凡夫の迷いの境地を言う。つまり、悟りの境地は迷いの境地に等しいという意味になる。

求道的な方法論で自分の主張を繰り広げてはいるものの、「徳をつく」という欲望に執着する長者を「究竟」の境地にいるとは言えない。しかし、長者の富を蓄積する行為を「大欲」としていること、それに前後の「貧富分く所なし」「大欲は無欲に似たり」という文との呼応関係を考えるならば、「究竟」は長者を喩えていると考えた方が自然であろう。いくら求道的な方法論を主張しようとも、所願を断じて一事に専念することが掲げられていようとも、実は長者は何の悟りも得ておらず、「理即」に等しい。もし、長者の求道的な可能性を言うものなら、長者は、「理即」にいるとされ、「理即は究竟に等し」とあるべきではなかろうか。

兼好が長者の人生観を多少とも批判しているのなら、それは単に長者の「大欲」に対してではないであろう。「徳をつく」というごく世俗的な目標のために、求道者さながらの生き方を標榜するという、目標と方法の平行が必然的にもたらす空虚さを批判しているのであろう。

銭を求める「大欲」が「無欲」に似ているとは、長者の所願を抑制する態度を評価するための言葉ではない。長者の「大欲」は、「無欲」に似ていながら、「無欲」とは根本的に違うことを強調するための言葉ではなかろうか。兼好は、長者の持論の中から仏道修行に通じるものがあると考え、最も世俗的な価値を追求する長者が求道者に近似してくることに興味を覚えたのであろう。しかし、「貧富分く所なし。究竟は理即に等し。大欲は無欲に似たり」は、その二者の間に大きな開きがあることを語るための言葉であると考えられる。

銭は使ってはじめてその存在価値がある。銭を使わず、欲望を叶えないのは、銭の効用を全く考慮しないことである。禁欲的に銭を貯めるだけで得られる心の満足感は何の意味もない。無常を認識せず、世俗的な欲望を満たすこともせず、銭を貯めるだけの生き方は、兼好の意識していた「利」を求めることからも程遠い生き方であるとしか言えない。

おわりに

「銭」は人間の生活に最も密接に関わるものである。無常観の文学である『徒然草』の中では経済的な側面、人間生活における「銭」の価値についての一貫した関心が見られる。無常の認識と経済的な関心は、矛盾することなく、兼好の中で共存していたと考えられる。そこで、銭の世界は、兼好にとって、無常を認識するきっかけとなり、ときには無常の思想を深化させる役割をもしていたのであろう。

第二百十七段では、「大福長者」の人生観と、それに対する兼好の批評が記されている。兼好は、長者の常住論については言及せず、所願を実現しない銭の蓄積は結果において貧乏人と変わりがないとだけ語っている。常住論を棚上げにし、所願と銭との関係を論評することによって、兼好は、無常の立場から長者を包容し、無常の自覚と欲望のむなしさを違う形で伝えたかったのではなかろうか。

【注】

1『鎌倉遺文』古文書編第三十二巻二四九七二・二四九七三

2橘純一『正註つれづれ草通釈』下　慶文堂書店　一九四一年

3永積安明『徒然草を読む』岩波新書　一九八二年　p167～168

神田秀夫・永積安明・安良岡康作校注・訳　新編日本古典文学全集『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記・歎異抄』第二百十七段解説部分

4藤原正義「徒然草三十九段をめぐって」『兼好とその周辺』桜楓社　一九七〇年　p117

5芝波田好弘「『徒然草』第二百十七段考―「究竟は理即に等し」を手懸かりとして―」『人文科学』大東文化大学人文科学研究所　一九九六年

6今成元昭「徒然草の源泉―仏典」『徒然草講座』第四巻　有精堂　一九七四年

※本文の引用は「正徹本」を底本とする、新日本古典文学大系『方丈記　徒然草』による。